

U.S.A・CA移民の成功者牛島ポテトキングを支えた 人々のその後の展開と現状 —池田久吉氏の家族史を中心として—

池 田 碩*

“Potato King” George Shima: The History of Kinji Ushijima,
His Associates and Their Kinsmen,;
With Special Attention to the Hisakichi Ikeda Family

Hiroshi IKEDA

要 旨

筆者の出身地である福岡県久留米市郊外の田舎でも、明治時代にU.S.Aへと雄飛する青年が現れた。CAでポテトキングと称される成功者となった牛島謹爾はその代表である。その農場を支えるために郷里を中心に多くの出稼ぎ移民が投入された。

しかし牛島の死亡や第2次世界大戦により、彼等の人生には大きな転機が訪れた。慌てて帰国する者、残留して財産没収され収容所ですごした者、さらに帰国していた者のうち戦後に家族と別離し帰米した2世達も現在老齢期に至り、その子供の3世達が農業とはまったく関係なく、シリコンバレーで活躍している家族もある。

それらの事例のうち筆者の親戚筋に当たる池田久吉家のファミリーヒストリーを通して、現在すでに4世に至っている実態を報告し、彼等にとって「移民」とは何だったのかを考えてみた。

〔I〕はじめに

鎖国から開国、明治に入ると外国の事情も急速に明らかになってくる。国民は身分制度から解放され「志」しだいでは、農民の中からでも世界へ踊り出ようとする若いエネルギーに満ちた青年達が現われてきた。

久留米出身で農家の三男として育った牛島謹爾は少年期には「漢学」を学んでいたが、さらに上京して勉学を積んでいるうちにこれからは「英語」の時代だと気づく。それでは本場のアメリカへ飛び込んだ方が早いと考え、渡米してしまう。「大志」を抱いて渡ったものの資金の持参は無く、ポテト畑の草取りやホテルでの皿洗い、冬期には森林の開墾をしてわずかの資金を貯える。そして小規模なポテト畑を持ち自立。その後も積極さと機敏さ、さらには時世にも乗り農場へと

2009年9月17日受理 *地理学教室教授

拡大させ成功し、ついに「ポテトキング」と称されるまでになる。その後は「日本人会会長」としての公的役も兼務する。

彼の大農場を支えるためには、郷里を中心に多くの農民達が出稼ぎ者として呼び寄せられた。しかしその後日本人排斥運動が盛んとなり、さらに第2次世界大戦で敵国民となると日本人は「収容所」に入所させられてしまう。一部には開戦直前に帰国する者もあり、そのために親戚や家族さえ分離した者も多い。一稼ぎして早目に帰国した者には郷里に成功者として立派な家を建てており、その多くは現存している。

そのような状況下に遭遇した筆者の親戚である家族の詳細なファミリーヒストリーを追い、戦中から戦後にかけての家族の展開、さらには4世に至っている家族の現状をモノグラフ的に追跡しながら移民とその結果、彼等にとって移民とは何だったのかについて考えてみようとするのが本報告である。

〔Ⅱ〕各人・各家族の活躍

A. 牛島謹爾氏の生涯

ポテトキングと称された牛島謹爾氏は、慶応元（1865）年1月6日誕生。福岡県久留米市梅満村（当時は久留米藩三潞郡掛赤村）の農家出身である。地元の源泉小学校、中洲中学校を経て、20才時に勉学のため東京へ行き三島中州の塾「二松学舎」で漢学等を学ぶ。その後、大陸へ夢を抱き、志だけで資金も持たず明治21（1888）年に23才で渡米する。とりあえず「福音会」の紹介でサンフランシスコ南郊コルマColma市のキラハン農園に日給85セントでポテト畑の草取りに雇ってもらいが、良く働くということで日給1ドルをもらう。その後、近くのオーシャンビュー Ocean Viewのポテト農園に移り、ここでは農耕馬の使い方も学ぶ。この頃、勉学目的の日本人学生は居たが、労働する者は少なかった。志は高くも農家出身の彼はさらに1890年6月には、サンフランシスコへ出て、ホテルで皿洗いをしばらくしたのち、ニューホープNewhopeの農園で果物の摘み取りや豆畑の草取りで働く。冬には近くのアーサーサウントンで林野の開墾もする。

1891年26才の時ニューホープの桃園で、樹間にポテトを植えさせてもらい成功する。この時の地主との契約は、馬は農園持ち、馬糧は半分、種芋も半分持ちで、収穫したポテトを折半することであった。

28才の時サンフランシスコ湾に注ぐサクラメントSacramento川下流からサンオーキンSanjoaquinのデルタ地帯に位置するスタテンStaten島の湿地を一部開墾し、ポテトを植えて成功する。次の年には隣接するタミナスTerminous島に移るが、この年は大雨で河川が大氾濫し全て失い破産する。しかし、1896年には再スタートする。

デルタの湿地帯の泥炭地を開墾するには、まず若干高くなっている砂堆地の周囲を堤防を築いて囲み、「輪中の島」にし、その中の芦や水草を抜き取り、水を出し、水たまりを埋めていくという多くの人手を要する大変な作業をせねばならなかった。その上豪雨による氾濫その一方では旱魃にも見舞われ、安定した収穫を得るためには自然との葛藤を繰り返さねばならなかった。この地域には白人の移民達が先行していたが、彼等は牧畜や畑作が中心で、湿地帯の開墾には不

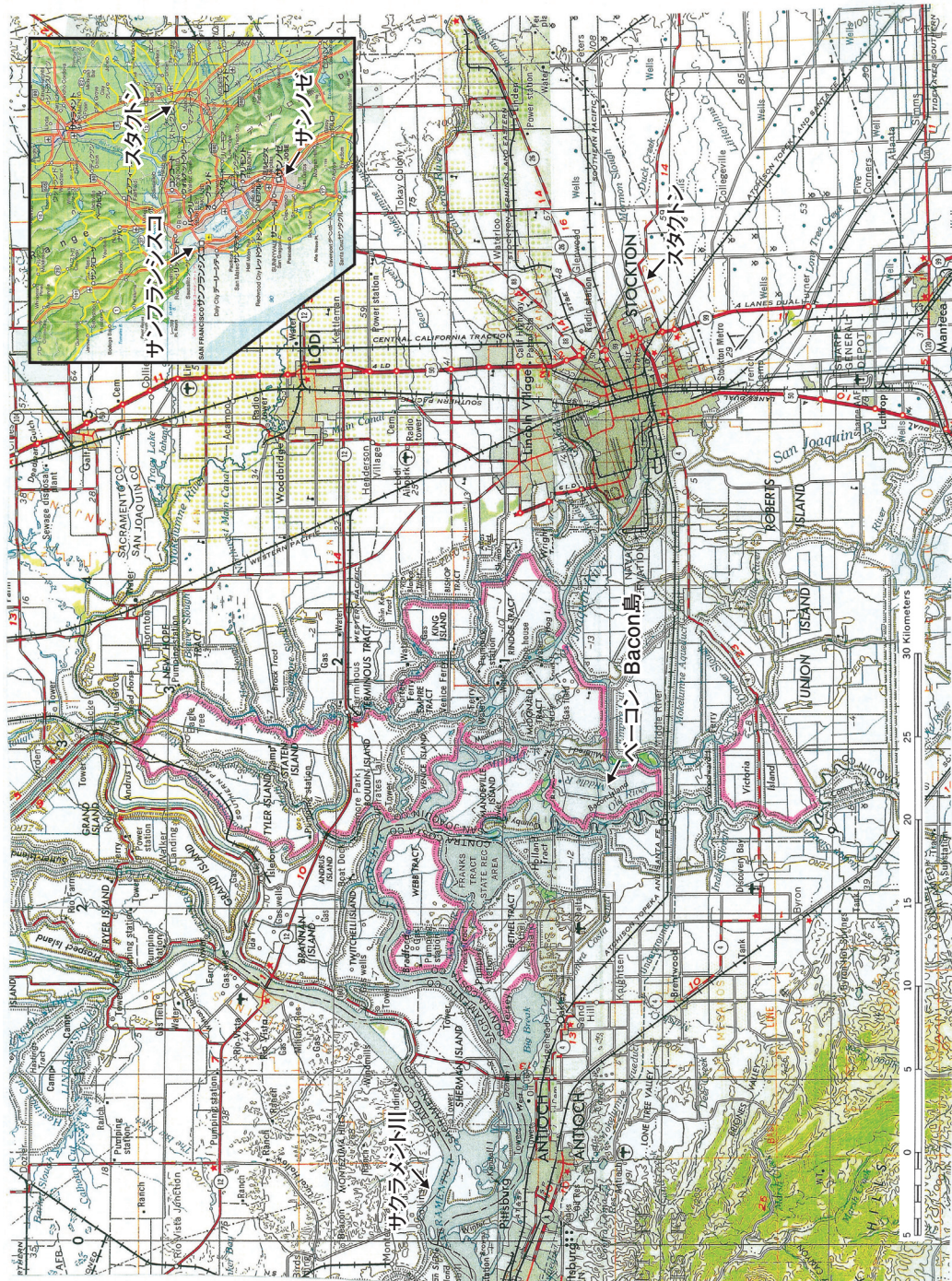


図1 ページ デルタ地帯の地形図と牛島農場の範囲

Fig.1 Page Topographic Map of the Delta and Distribution of the Ushijima Farms

得手であった。それに対し日本人は元来水田農民が多く、牛島も筑後川のデルタ地域の農家出身であったし、彼を支えるために入植した人々の多くも洪水常襲地域でもあった筑後川周辺の農村出身者が多かったのが幸いした。

さらに苦勞して収穫したポテトを白人達が無造作に出荷している様子を見て、より丁寧に扱い処理し少しでも価値を高めて売ろうと考えた。そこで彼は一計を案じ、仲買人や商店があつたやすく売りやすいように収穫したポテトを近くの川水を利用して洗ってから袋に詰めて出荷してみたが、大当たりした。目に付きやすいように赤い袋には「シマファンシー」とネーミングを付け生産地と連絡先を記し付加価値を高めて商品化を目指した。その結果、1897年度は大きく利益を上げた。しかし、次の年には大旱魃に見舞われ、灌漑のために堤防を切らねばならなかったし、耕馬も牧草が取れず飢餓状況となり多くを手放した。この年を乗り越えると明治31（1898）年には、米国とキューバ・メキシコとが開戦食料が高騰したため巨利を得た。1900年からの3年間は天候にも恵まれ、ベーコンBacon島へも開墾を拡大させて収穫を上げ充実してきた。1910年頃には190km²の土地に約2000人を雇用し、馬300頭、ガソリンボート2隻、汽船の引き舟も所持し、収穫高はカリフォルニア州の5割、全米の約1割を占めポテトキングと賞賛されるようになった。当時現地では「ウシジマ キンジ」の発音が難しいためわかりやすく、別称として大統領のジョージと自身の牛島のシマを合せて「ジョージシマ」と称していた。

ところがこのころから、日本人への排斥が盛んになる。この問題を緩和するため明治39（1906）年に在米日本人会が組織され、推されて会長となる。1913年には、日本人の土地所有権禁止法が加州議会で成立。その後1924年には、米国議会で日本人排斥を目的とする帰化不能外国移民禁止法が通過するなど多難な時期に、公的な仕事にも対応した。しかし昭和元年（1926）年ロサンゼ

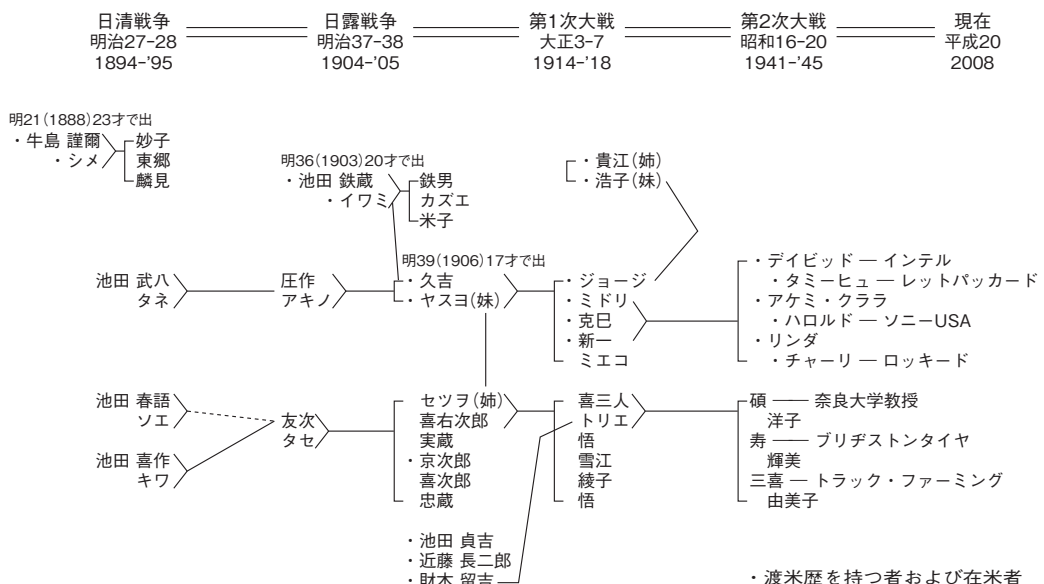


図 2. 関係者の系図
Fig. 2. Lineage

ルスにて脳溢血で倒れ61才で没す。在米37年だった。彼の生涯と活躍は、昭和初期の修身の教科書にも「進取の気象」を持っていた人として紹介されている。

スタクトンStockton北方20kmのローダイLodiの「サンオーキン郡立歴史博物館」には、デルタからのハウスが移築され、当時使用されていた農業機械や器具の他、謹爾を中心とした写真などが沢山陳列されている。サンオーキンデルタカレッジには1975年「シマセンター」が設置された。

牛島家の子孫の方々は、第2の古里であるスタクトンをはじめ周辺各地に居住しており、現在も毎年ファミリー会を行っておられる。日本の郷里久留米市梅満町では、地元の自治会が中心となって平成11（1999）年11月3日に「ポテト王生誕碑」が建立され、平成20年からは「ポテト王講演会」を毎年開催することにし、すでに2回を終了次回へ向けての準備が進められている。

B. 池田鉄蔵氏の生涯

筆者の郷里の久留米市・旧三井郡山川村神代の集落からは、親戚筋の池田鉄蔵（明治16年生）氏が明治36（1903）年20才で単身出稼ぎを目的に渡米、スタクトンStocktonへ行き牛島農場で働き出す。そのころ農場は拡張期で、デルタ地帯周辺の島を堤防で囲み次々と「輪中」を造り干拓し開墾していた。そのうちに池田鉄蔵は、牛島農場のホームマン（ボス）の一人となり活躍する。

その後、スタクトン市東方のリンデンLindenで自立し、主としてトマト・レタス・キャベツ・ハウレンソウなどの野菜作り農家となり成功する。この間家族やその後の状況は、昭和11（1936）年刊「在米福岡県人の事業」ロサンゼルス刊、に記されているので転載しておく。

明治十六年四月六日に生る。海外発展の雄心を抑へ難く決意するところあり単身にて太平洋の波濤を越へ同三十六年八月桑港に上陸せり。其後氏は同胞農家の勢力の著しきスタクトンに至り大農園のホームマンとして活躍せしことありしが此の間農事を研究し辛苦を凌ぎ獨立自営の準備に専念したり。現在はリンデンに居を構へ主として野菜の生産に活動を續けてゐる。氏は家業に精進すると同時に同胞の福利増進に考慮するところあり、地方の學園又は公務に盡瘁し殊に同郷人のため福利を図つてゐる。大正八年に氏は久方振りに故國を訪問し郷里にて英氣を養ひ、此の間良縁に恵まれイワミ夫人と結婚し相携へて再渡米せり。爾來夫妻は相協力し家業の發展に努力し夫人はよく夫に仕へ内助の功を完ふしつゝあり、長男鐵男（16才）は郷里の農學校に學び現在は手工業を研究してゐる。長女カズエ（15才）次女米子（13才）は公立學校に學びつゝあり、家庭は和氣霽々たり。

その後も、リンデンで農業を続けるが、第2次大戦開戦にともない、南カルフォルニアの「マンザナManzana収容所」へ入所させられる。長女・次女も成長し、この収容所内で結婚している。終戦後は、スタクトン市で次女と一緒に生活し、老後をすごし、1967年84才で死亡。戦後は、郷里の親戚との間の交流は途絶えてしまっている。

C. 池田久吉氏の生涯

筆者の父の甥に当る池田久吉（明治16年生）氏は、明治39（1906）年に17才で単身、渡米。従兄である池田鉄蔵氏が先行していた「牛島農場」で働く。

一端帰国し、筆者の祖母の妹に当るヤスヨさんと結婚。長女の美恵子（1924年）、長男新一（1929年）が生まれた後、再渡米。その折、美恵子は隣家であつた姉の家に預けられ筆者の父達と一緒に

に生活。長男の新一だけを連れていく。

輪中化したベーコンBacon島には、現在も当時の状況を物語る建物などの一部が残されている。久吉達もデルタ地帯のベイコン島を輪中化し水を抜いた土地にポテトを中心にアスパラガスを栽培する。農作業中のタバコは厳禁。泥炭地を干拓して乾燥させた土地なので、火事となれば畑の地下まで燃えるため火災が拡大すると消火のため輪中の堤防を切って水を入れねばならなかった。

収穫したポテトは、輪中堤防の端に建てた作業小屋に運ばれ、屋内では長いベルトコンベヤにポテトを乗せまず水洗いし、次に乾燥させ、大きさを選別し袋詰めの流れ作業を経て、小屋の外に出ると堤防下の河から船積みされ、一部はトラック積みで市場のマーケットへと直接出荷された。さらに「シマファンシー」の名が入った赤い麻袋に詰められたポテトは貨車で全国各地へと運ばれて行った。

久吉氏も当時牛島農場の12ヶ所位のホームンのうち、No.8のボスとして活躍する。ここだけで、シーズン中は60～100人程が、オフシーズンでも20～30人が働いていた。ここで、次女ミドリ緑(1932.9.9)と次男ジョージ譲治(1935.2.22)が生まれる。2人は幼年期をこの地ですごす。筆者も次男のジョージ氏の案内で現地を訪問した(写真ページ)。

久吉氏は、1939年に自立し、南カルフォルニアのサンタマリアSantamariaで野菜や豆類を栽培するが害虫(根虫)に襲われ全滅し失敗する。あきらめて1941年には従兄の鉄蔵氏のリンデンの農場へ移る。しかしこの年の11月、戦争へと雲行きがあわたしくなってくる中第2次大戦直前に、最後の引揚船となった竜田丸で家族と共に帰国する。一方12月8日開戦とともに鉄蔵氏の家族は、財産を没収されマンザナの収容所へ入所させられる。

D. 戦後の久吉氏の家族

日本へ帰国後の久吉氏ヤスヨさん一家は、長女で残留していた美恵子さんも含めて家族全員がそろい一緒に郷里の山川村神代で過ごす。長男の新一は3才で日本を出て10年ぶりの日本だったが、次女のミドリ10才と次男のジョージ7才はUSA生まれの2世ではじめての日本であり、まだ幼いながらも何かと戸惑いが多かったようである。さっそくミドリは、12月に父と小学校へ入学の手続きに行く。年齢的には3年生のはずだが1年下げて2年生に編入する。アメリカのスクールと同じ感覚で靴を履いたまま教室に入ったので、明日からは土間で脱いで入るように注意を受ける。他方教科書はアメリカでは学校にそなえつけであったが、日本では個人のもの。これは家に持ち帰ることができなじみのうすい日本のこと(教材)を家でも勉強できよかった。毎朝の教育勅語の朗読や運動場での行進はつらかったが、 $2 \times 2 = 4$ 、 $2 \times 3 = 6$ から $9 \times 8 = 72$ 、 $9 \times 9 = 81$ はアメリカではやらないのでよかった。しかし、敵国となったアメリカ生まれであり、 $\bigcirc \bigcirc \cdot \triangle \triangle \cdot \times \times$ はアメリカではどうだと聞かれ、答えるとそれはウソだと信じてもらえなかったという。村での生活では、買い物ができない。品物が無いし、店も身近にはない。家では、トイレや風呂に慣れるのが大変だった。食べ物では、牛肉を食べないので、近くで獲れる川魚や、時折家で飼っているニワトリを食べた。パンは無く、ごはんは麦の方が多く、サツマイモ入りのこともあった。初対面の姉の美恵子さんとは、迎えに来てくれていた久留米駅であれがねえちゃんよと紹介され

た。身体が弱く病気がちだったので、いつも姉が気を使ってくれたのがとてもうれしかった。小学校を卒業して、新生中学を出、さらに久留米高等洋裁学校を卒業した。その後、しばらく市役所で働いていた折出合った友人が中学校時代の同級生で、さらにその友人と一緒に働いていた女性の兄がアメリカ生まれの弥永克巳氏であった。当時福岡近郊の板付の米軍基地に勤務中で、アメリカ生まれと育ちということで紹介され、それが縁となって結婚することになった。1925年にアメリカで生まれた克巳氏は9才まで過ごし、教育のため1934年に日本へ帰国していた。しかし結果的には日本兵となり、満州で終戦となり、シベリアへ送られバイカル湖近くの炭鉱で働かされ帰国した。その後米語ができるので米軍基地エアーホースで働いていた。

E. 2世で帰米したジョージ氏と家族

USA生まれで次男のジョージ氏は7才で帰国。地元の小学校・中学校を卒業し、高校を2年で中退。昭和28（1953）年秋に、戦時中は帰国せずマンザナ収容所に入所されていた父の従兄の池田鉄蔵氏（スタクトンStockton在住）に呼び寄せ人となってもらい帰米した。スタクトン到着後はとりあえず、アルバイトをしつつ、地元のナイトスクールへ行った。そうして、スタクトンハイスクールへ入学、3年後に卒業。さらにジュニアスタクトンカレッジJunior Stockton Collegeへ1年行く。その段階で、兵隊の年齢が近づいたので生活一切が保障され若干の手当も付くので除隊後にカレッジを続ける方が得策と考えて4年間の志願兵に。しかも郷里への想いも込め海軍で太平洋艦隊を希望した。1956年6月NAVYに入隊。最初はサンディエゴSan Diegoの基地で基礎訓練、その後アラメダAlamedaの海軍航空基地へ。その後、当時最新型の航空母艦ハンコックHancock（5万トン級で乗組員4000～4500人）へ乗船勤務となる。日本への寄港を念頭に太平洋艦隊を希望したが、実際その通りとなり毎年空母が日本へ寄港する毎に休暇期間中に両親の待つ郷里へと、兵隊では食事が良かったため丸々と太って帰ってきた。丁度そのころ筆者は大学生だったので京都にも来られ市内の各地を案内した。兵隊生活の思い出としては、陸上での訓練時には日本人なので背が低いため先頭で旗を捧げ持つカッコ良い役であったこと。乗艦時には幸いに戦争が無かったため気分的にも楽だったし、会計係だったので「ソロバン」を得意に使用し皆をびっくりさせていたこと。厳しかったのは真水の使用が制限されシャワーでも海水で洗い最後に真水を少しだけ使用していた。

1960年6月除隊する。除隊後1960年9月からスタクトンカレッジへ復学し、1962年2月に卒業する。その後、1962年2月San Jose State Universityへ入学し1965年2月に卒業する。1965年5月ロッキード社へ就職。1986年9月浩子さんと結婚。その後2人の子供を授かったが早世した。会社を27年間勤めて1992年9月退職。現在はサンノセSan Jose市で過ごし健在。

F. 2世で帰米したミドリさんと家族

1954年6月結婚し、1956年2月克巳氏と一緒に帰米。克巳は単身フロリダの米軍基地へ、ミドリはしばらく克巳の両親宅のサンフランシスコで生活。克巳の除隊後1956年10月からサンフランシスコのアパートに移り、長女のクララClaraが56年に生まれる。その後1961年からはRedwood市に家を購入、長男ディビッドDavidが60年に、次女リンダLindaが67年に誕生。克巳氏は除隊後、

TWA航空に勤めたあと、ガーデナーとして自営、さらにヒューレットパッカードに勤務後退職。現在はSantaclara市に居住。ミドリは子育てに余裕が出てきた1975年9月から「カニャーダカレッジCañada College」に入学。ビジネス、タイピングや音楽を学び、1981年6月に卒業。その後1982年～1996年までの15年間、日系の「オリエンタルトレーディングカンパニー Oriental Trading Co」に勤務した。

日本へ最初に里帰りしたのは帰米6年後の1962年4月、長男のディビットが生まれた年で、両親が迎えてくれ感慨無量であった。最も思い出深いのは、1972年の夏の子供達3人とそろって帰った時であった。母が大変喜んでくれ、長男の新一さんも一緒に教会や石橋文化センターなどを訪ね楽しかったが、すでに父久吉氏は1969年に他界していた。最近の里帰りは、子供達がすでに3人共大学を出、就職し結婚しており、2人での族で2002年4月であった。

長女のクララClara Akemiは1987年12月Harold Hasimotoソニー USA勤務と結婚（子供Christina18才、Douglas16才）

長男のディビッドDavid Satoshiインテル勤務は1989年9月Tami Yamagisiヒューレットパッカード勤務と結婚（子供Stephanie17才、Nathan15才、Euan7才）

次女のリンダLinda Naomiは1993年7月Chaley Ogataロッキード勤務と結婚（子供Amanda12才、Gustin8才）。

3世の子供達は皆理系で、シリコンバレーで活躍しており、4世の孫達も大きく育ってきている。

2世の両親は2004年6月22日に「金婚式」をむかえ、子供や孫達が全員集まり祝ってくれた。

〔Ⅲ〕 さいごに

郷里の久留米市山川町神代には現在、長男の新一氏夫妻が子供や孫達と同居しておられる。USAから1941年11月帰国後久しぶりに家族全員がそろい、農業を中心にそれぞれに仕事や学生として過ごされたが、そのうちに長女的美恵さんが結婚して出られ、さらにUSA生まれの次男ジョージ氏がUSAの高校・大学での教育を目指して帰米。続いて次女のミドリさんも、2世同志で結婚し帰米された。その後父久吉氏が81才で昭和44年（1969）年に、母ヤスヨさんは78才で昭和47（1972）年に死亡された。

明治生まれ、大陸へと17才で大きな夢を抱き単身で渡米した久吉少年が、時代の大浪に翻弄されながらたどった結果は終了したが、4人の子供達は郷里とアメリカのシリコンバレーに2人ずつ離れ、両国に分かれて活躍している。筆者から見ると、すでにミドリさんの家族はアメリカ人として同化しており、次の世代に至ると日本の郷里とはつながらないのではと心配する。そのためにもこの記録を残しておく意味があると考えた次第である。

写真ページ A デルタ地帯の現状 ベーコン島周辺

Photo, Page A Delta Zone Today Bacon Island

①



②



③



④



⑤



① デルタ地帯の水郷景観

② 輪中堤防上に残るポテト洗浄・袋詰め作業・棟

③・④ 水位が上昇してくれば、すぐに避難できるように輪中堤防下に建てられている労働者の住宅

⑤ ベーコン島への道標

池田久吉氏はこの島でホームマン（ボス）として働き、ミドリさんとジョージ氏は幼児～少年期をすごした。

写真ページ B ポテトキング牛島謹爾と当時の農場風景

Photo, Page B Kinji (George) Ushijima "Potato King" and Farmland Scenery in the Early Days

2007年(平成19年)12月20日(木曜日) 言 宣 寄 券 (第三種郵便物認可) ①

米、ポテト王、の功績伝える

牛島の農場で収穫された山積みジャガイモ



久留米出身の牛島謹爾

米国で広大なジャガイモ畑を開墾し、『ポテト王』と讃えられた久留米市出身の実業家牛島謹爾(1864~1926)の子孫が、所蔵する写真など98点を同市に寄贈した。寄贈品は1908~26年のもので、成功を夢見て海外に渡った日本人の足跡をたどるうえで貴重な資料として注目されそう。

子孫が写真などを市に寄贈

牛島は旧久留米藩の掛赤村(現・久留米市梅満町)の農家に生まれ、24歳で渡米。サンフランシスコ市で皿洗いをしながら英語を学び、米国人の得意なジャガイモに着目し、栽培法を研究した。1891年、同市東側の湿地帯にある「魔の原」と呼ばれた角州で開墾を始め、27年かけて約100平方フィートのジャガイモ畑を持つまでになった。農場では約2000人を雇用し、収穫高は全米の1割を占め、「ポテト王ジョージ・シマ」と称された。1908年、在米日本人会の会長に就任し、日米親善にも貢献した。

寄贈品は、牛島が久留米の実家にあてた書簡や写真など。農場での作業風景や、久留米の実家の法要に訪れた親族の写真、牛島が長兄にあてた手紙などがある。



62歳ごろの牛島謹爾(1925年撮影)



- ① 読売新聞の記事
2007年12月20日

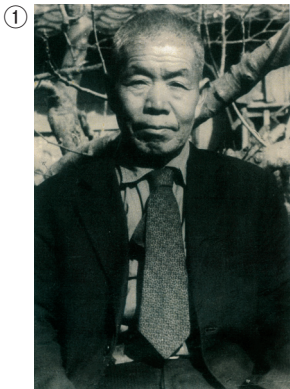
- ② 12頭だての大型耕作機械
サンオーキン郡歴史博物館展示

- ③ 「在米日本人会・会長」時代
(1912年)
前列右から3人目が牛島謹爾氏
ロサンゼルス「リトルトウキョウ
100年物語」新潮社(1987)所収



写真ページ C 池田久吉氏の家族 (1)

Photo, Page C Hisakichi Ikedás Family (1)



①② 郷里の両親久吉氏と
ヤスヨさん 1966

③ 戦前のスタクトン時代
母と3人の子供達
1939

④ 戦後帰米した頃の
ジョージ氏 1954

⑤ 帰米後最初の里帰りで
京都平安神宮を訪れる
ミドリさん長男ディビッド
と大学生時の筆者 1962

⑥ ジョージ氏と浩子さん
のおみあい 1968

⑦ 3度目の日本訪問時
筆者宅で家族と 1988

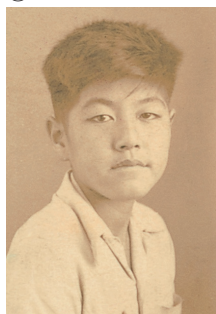
⑧ 郷里の家族全員
がそろう
中央が両親、
右長男新一氏、
左長女恵美子
さん 1966



写真ページ D 池田久吉氏の家族 (2)

Photo, Page D Hisakichi Ikedás Family (2)

①



長男 新一 (13才)



次女 ミドリ (10才)



次男 ジョージ(7才)

① 左上3枚
日本へ帰国時の写真

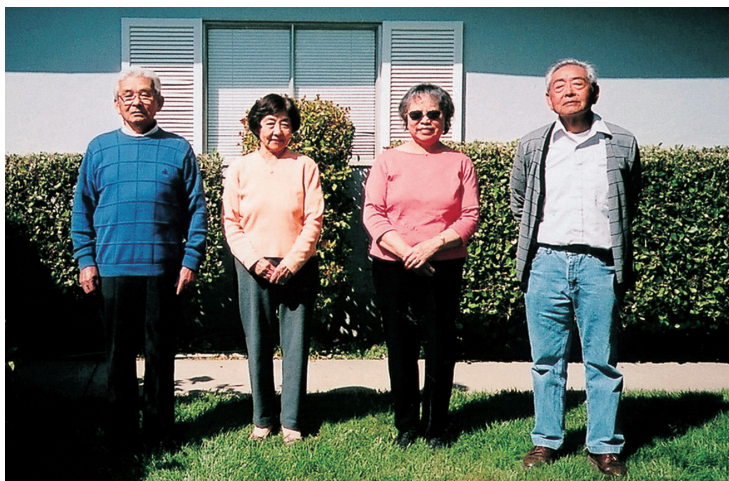
② 長男新一氏(右)の
家族 帰国後最初の
USA 訪問 1993.7

③ 現在の USA 家族
左から克己氏、ミドリ
さん、浩子さん、
ジョージ氏 2009.4.26

④ 克己氏・ミドリさん
「金婚式」
3世・4世達全員が
そろう 2004.6.22



②



③



④

注

- 1) 佐藤拓平 (1998)：カルフォルニア移民物語、亜紀書房
- 2) 廣畑恒五郎 (1936)：同胞発展史上に輝く県人―ポテトキング牛島謹爾「在米福岡県人と事業」所収、在米福岡県人と事業編集事務所ロサンゼルス
- 3) 文部省 (1930)：第12課 進取の気象、高等小学校修身書―巻1・所収
- 4) 山田義雄 (2008)：アメリカでポテトキングと呼ばれ日本人の心を伝えた牛島謹爾「花は一色にあらず」所収、西日本新聞社
- 5) 景山正夫・他 (1987)：リトルトウキョー 100年、新潮社
- 6) 池田碩 (2004)：USA内陸における日系人社会の成立と解体および現状、奈良大学総合研究所所報第12号
- 7) 池田碩 (2010)：ブラジル移民の研究―移民家族がたどった「史的モノグラフ」からの考察―、奈良大学総合研究所所報 第18号

“Potato King” George Shima: The History of Kinji Ushijima, His Associates and Their Kinsmen,; With Special Attention to the Hisakichi Ikeda Family

Hiroshi IKEDA

When Japan emerged from its long, self-imposed, national isolation and entered the Meiji Period (1868-1910), foreign influences rapidly entered that country. Suddenly freed from previous class restrictions, those who wanted to, especially young energetic peasants, left for the many corners of their newly accessible world outside of Japan. Kinji Ushijima was one of them.

Kinji Ushijima was born in 1865, the third son of a farming family living in the Chikugo River delta region of Kurume in Kyushu. As a youth, he took up the study of Chinese and subsequently went to Tokyo to continue his studies there. However, he soon came to the conclusion that English, not Chinese, was the way to go, and so at the ripe young age of 23, he left for the United States, full of dreams but with empty pockets! To make ends meet, he worked pulling grass at California Central Valley potato farms, washed dishes at area hotels, and in winter, helped clear forests to make way for cropland. He saved his money and subsequently used it to buy land there and develop his own potato farm. Just five years after his arrival in California, he bought his first unused wetland in the low, flood-prone Sacramento-San Joaquin Delta, surrounded it with a levee, drained the land therein and started growing potatoes on it. He was so successful at what he did, and thanks to the various changes in the world around him, he was able to expand his land-holdings and potato production to such an extent as to be called locally, “the Potato King”.

By 1910, he had acquired some 190 sq.km of land in the delta, had some 2000 people working the

drained, levee-protected fields for him, was using 300 horses to plow and reap, and owned two gas-powered boats to carry his products to markets using the rivers. Eventually, he was producing 50% of California's potatoes and some 10% of all the potatoes sold in the United States, under the brand name "Shima Fancy".

In 1908, he founded and was the first president of the first Japanese Association in the United States. Unfortunately, in 1926 while in Los Angeles, he suffered a severe brain hemorrhage and passed away there at the age of 61, ending a productive and highly successful 37 year residence in the United States. In 1975, the Shima Center was dedicated in his name at San Joaquin Delta College.

In order to keep Ushijima's potato farms going, many young peasants were hired from his hometown, Kurume, in Kyushu. Despite working hard and living frugally, Japanese immigrants suffered from exclusion and discrimination, and later both Japanese immigrants and Japanese-Americans too were rounded up and put into isolated internment camps during World War II. Just before the outbreak of the War in the Pacific, innumerable families and their relatives were separated. Some went back to Japan while others remained in the United States. It is at this point that the Ikeda family story begins, how this immigrant family went through the War period and how it developed to its present 4th generation in the States.

The author's hometown is Kurume city. One of his distant relatives Tetsuzo Ikeda was born there in 1884 in the village of Yamakawa (now part of Kurume). In 1903 at the age of 20, the young bachelor went to Stockton, California to work on one of Ushijima's potato farms. It was a time when Ushijima was expanding his holdings of islands in the delta, surrounding each with a levee and draining them so that crops could be grown. Tetsuzo worked hard and eventually became the foreman of one of those farms.

One of Tetsuzo's cousins, Hisakichi Ikeda, born in 1889 in Kurume, went to the States on 1906 at the age of 17, worked on the farm managed by Tetsuzo. Hisakichi, and he too eventually became foreman of farm #8, one of the twelve Ushijima farms. During the planting and reaping season, he was in charge of 60 to 100 workers, while off season he watched over 20-30. Hisakichi's Japan-born wife Yasuyo was the author's aunt's sister, a direct relative. Hisakichi and Yasuyo had four children, two born in Japan, Mieko (b. 1926) and Shinichi (b. 1929) and two born the United States. Midori (b. 1932) and George (b. 1935). In November of 1941, one month before the start of the War in the Pacific, the whole family hurriedly got on the last ship back to Japan and worked on farms and/or attended school there. The oldest of the four, Mieko, got married and moved out. The youngest, George, eventually went back to the States and attended high school and college there. His older sister, Midori, married a 2nd generation Japanese-American man, Katsumi Yanaga, and after the War, they too went back to the States. In 1969, their father Hisakichi died at the age of 80, and their mother Yasuyo passed away in 1979 at the age of 78.

Today, Shinichi, his wife and their children and grandchildren live together in Kurume. George worked at a major aircraft company in the northwestern United States and is now retired there. Katsumi and Midori Yanaga had three children, each of whom is now working at major Silicon Valley etc. companies in California.

The author visits them whenever he goes to the States or when they come to Japan.